

ラジオと本

広がり

文章を書く気持ちになれず、「図書館だより」をしばらく休んでしまった。

太陽光のなんとか線

太陽光のなんとか線が AM ラジオの電波を阻害するらしい。

といっても、皆さんはラジオの AM、FM すら知らないだろう。ラジオで流れる電波には、AM、FM、短波の3種類がある。NHK 第1やIBCの放送が AM で、NHKFM や FM 岩手が FM。FM 放送は音質がよいため、音楽番組が多い。

冒頭のことを少し調べてみた。大気圏を構成する電離層 D が電波を吸収するそうで、この電離層 D は太陽からの紫外線やエックス線によりできるらしい。夜になると太陽の影響が弱まり電離層 D 層が消滅し、AM ラジオの電波が遠くまで届くそうだ。詳しくは各自調べて欲しい。

夕方から朝まで、遠方の AM 放送が聞こえてくる。東京の TBS(954)、文化放送(1134)、ニッポン放送(1242)、大阪の毎日放送(1179)、ラジオ大阪(1314)といったぐあいである。AM ラジオには、テレビのような「全国ネット」の番組は少ない。内容だけでなく、CM や交通情報も含め、そのローカル色が魅力なのだが、東京や大阪の番組は有名タレントを起用していることもあり、聴きごたえがある。

かつて中高大学生には「深夜ラジオ(深夜放送)を聴く」という文化があり、勉強しながら、あるいは布団の中で…その傍らにラジオ放送が流れていた。「オールナイトニッポン」や「ヤングタウン」という番組はその代表格であり、タモリ、ピートけし、中島みゆき、笑福亭鶴光、笑福亭鶴瓶、谷村新司などは絶大な人気を博した。

深夜ではないが、岩手では日曜の午後「IBC トップ 40」という、誰しもが聴いている番組があった。

話は変わるが、子どものころ、「外国といえばアメリカ」だった。外国人を見れば「アメリカ人」と思った。そういう狭い発想しかできない時代があった。

今は海外の情報、タレント、音楽、もの…普通に日常であるが、そうでなかった。まだまだ貧しい社会だったのだろう。振り返るとそんな時代が逆に不思議である。

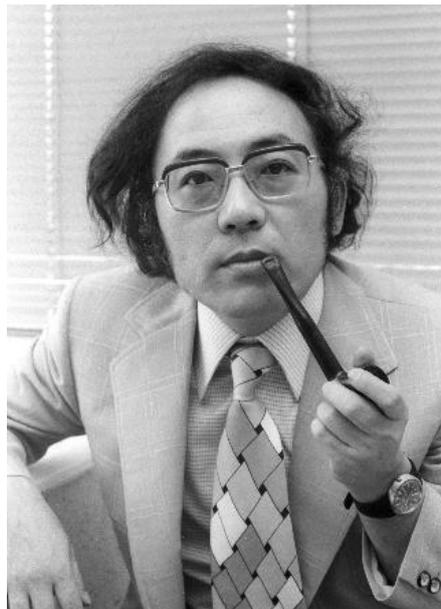
Olivetti

私が深夜ラジオを聴くようになったきっかけは、中学校1年生のころに聴いた「ミッドナイトプレスクラブ」(TBS 月～金 24:00～24:10)。ジャーナリストの竹村健一が日本駐在の海外ジャーナリストにインタビューする番組だった。番組の冒頭で「I'd like to present a variety of views to make

you aware that different peoples have different opinions and the prevalent the Japanese views are in the minority.」と述べていたように、「日本の常識は世界の非常識」とされる日本人の考え方や日本社会の閉鎖性を掘り起こす番組だった。日常の価値観が崩れるような爽快さと、世界がとてつもなく広いような気がして夢中になって毎晩聴いていた。番組のスポンサーは「Olivetti」であった。PC がなかった時代、文章を活字化するのにタイプライターという機器があった。Olivetti はイタリアの老舗タイプライターメーカーで、その CM を聴き、私は英文も書けないのにオリベッティタイプライターに憧れた。

竹村健一は昭和、平成を代表するジャーナリストのひとりであったが、私はこの番組が縁で中高大と竹村健一の大ファンになった。時に番組では「竹村健一の著書プレゼント」があり、2回当選した。氏の本もたくさん読んだ。講演も何度か聴きに行った。ファンクラブがあり、会費を払って会員にもなった。毎月送られてくる会報には、堺屋太一、石原慎太郎、盛田昭夫…といったオピニオンリーダーの発言や文章が載っていた。竹村のもとで学んだ 20 代の小池百合子の文章もあった。

大人になって、氏とは考え方が違うような気がしてきたが、世界に目を向けさせてくれた点で、氏は私が影響を受けた人のひとりである(ほかに2人いる)。



↑ 竹村健一…1930～2019

ジャーナリスト。評論家。鋭く先見を持った批評をした。その風貌と「これだけですよ」「だいたいやね～」の口癖でも人気を博した。カゴメデリシヤソース CM での日本語発音とは違う「デリーシヤ」は流行語にもなった。

この番組から、その前後の時間帯、別の周波数へと、ラジオの世界が広がっていった。春風亭小朝、ラビット関根、小堺一機、笑福亭鶴瓶、新野新、タモリ、谷村新司、若山源蔵…

昔ははがき、今はメールだが、番組へ投書するのも楽しい。たまに読まれる。番組によっては粗品が来ることもある。番組のパーソナリティから返事が来ることもあって、タレントの浜村淳から長文の手紙をいただいたときは驚いた。私が唯一聴く音楽番組「山下達郎のサンデーソングブック」(FM 岩手 日 14:00～55)には、時折高校生からメールが来ていて、高校生も山下達郎を聴いていることにうれしくなる。

周波数をアナログ目盛で合わせて聴いていた。そして、デジタル表示(数字)になり、今は「ラジオ受信機」だけでなく、スマートフォンのアプリ(radiko や NHK らじるらじる)でインターネットを通して聴けるようになった。遠方の放送を深夜に聴いていたころ、遠方のため雑音を我慢して聴いていたが、今はどの放送でも 24 時間明瞭に聴けるようになった。しかも「聴き逃し」が聴ける。

時間があればラジオ放送を流している。「聴いている」のか「流している」のか？

その中ではいろいろな話題が流れてきておもしろい。社会のこと、生活情報、地域のこと、文化やスポーツのこと、エンタメのこと…雑多な中に、興味ひかれるものや発見がある。松村邦洋が日本史通なのも「松村邦洋の DJ 日本史」(NHK 第1 日 13:05～55)で知った。ネット情報との違いは、求めていない意外な出会いがやってくるころだ。これは話題でなく音楽でもいい。

私が好きな番組は「高橋源一郎の飛ぶ教室」(NHK 第1 金 21:05～55)、「大竹まこと ゴールデンラジオ！」(文化放送 月～金 13:00～15:30)、「森本毅郎スタンバイ」(TBS 月～金 6:30～8:30)、「トーキング ウィズ 松尾堂」(NHKFM 日 12:15～13:55)そして、「新日曜名作座」(NHK 第1 日 19:20～50)。

以前から「本との出会い」ということを話している。番組内で本が紹介されることもあるが、番組に出てくる人の本を読んでみたくなったり、ゲストとして登場した人の本に興味を持つこともある。「新日曜名作座」は小説を朗読する番組である。

昨日、本を買いに行ったがなかったので注文することにした。大江健三郎の『性的人間』(新潮文庫)。これも、何の番組だったか忘れたが、ラジオで話題にあがった本である。

(佐藤貴之)

*賢明な水高生の皆さんは、ここで挙げた、堺屋太一、石原慎太郎、盛田昭夫、小池百合子が誰か分かりませうね？

三島由紀夫 と 11月25日 三島事件

1970年11月25日、ノーベル文学賞候補といわれた三島由紀夫が、主宰する民兵組織「楯の会」会員4人と日本刀を持って東京・市谷の陸上自衛隊東部方面総監室に乱入し、益田兼利総監を監禁。三島は庁舎のバルコニーから自衛隊員に向けクーデターを呼び掛けた後、総監室に戻り切腹し、その首は側近の森田必勝によって介錯された(享年45歳)。

柴田錬三郎『御家人斬九郎』で、主人公の斬九郎は、貧乏御家人の副業として「かたてわざ」(切腹の介錯)をしているが、武士の切腹の儀式は、切腹のあと、とどめを刺すために、その首をはねた。しかし、それは「首の皮一枚」を残し、頭が地面に落ちないようにすることで、斬首刑との違いを付け、武士の誇りを尊重した。「首の皮一枚」の語源である。三島の場合も、森田とともにいた古賀浩靖は、そのとおり介錯した。

これが、「三島事件」で、人気作家が起こした事件だけに社会に衝撃を与えた。

三島は、戦後日本文学を代表すると同時に、日本国外においても広く認められノーベル文学賞候補にもなった作家であった。ま

た、文学だけでなく演劇や映画も制作し、これに出演するなど広く芸術活動を展開し、彼をめぐる人脈も広がった。その彼が、なぜそのような衝撃的な死を選んだのか。今も三島文学研究のほか、三島の人物像、三島の思想、そして「三島事件」について、多くの研究がされている。

伝説の「東大教養学部 900 番教室」

1969年5月13日、超満員となった東大教養学部で、三島由紀夫と東大全共闘の討論会が開催された！

過激で時に暴力も辞さない左翼の「東大全共闘」に右の三島が招かれ、周囲は命の危険さえ危惧したなか、三島は単身乗り込む。そして、自我と肉体、暴力の是非、時間の連続と非連続、政治と文学、観念と現実における美…互いの存在理由を巡って、激しく、真摯に両者は議論を闘わせた。

会場となった東大教養学部 900 番教室は、今も駒場キャンパスに当時のまま残り、使用されている。

これを記録したドキュメント映画『三島由紀夫 VS 東大全共闘』(2020年公開)はネットフリックスで見られる。



職員室前の「ライブラリストリート」に、三島由紀夫の小説を並べた。長編、短編、さまざまなで、読みやすいものもある。

これを機会に、ぜひ一冊手に取って見て欲しい。

新購入図書 おすすめの本

偽者論

尾久守侑 著 金原出版

偽者…表面上はうまくやっているけれど「自分は本物ではなく、偽者である」という虚無感を拭うことのできない、現代のパーソナリティを持つ人々のこと。

表紙がキラキラなので画像を掲載できません

言葉の展望台

三木那由他 著 講談社

いま、あなたとの会話で起きたことは、いったい何だろう？ マンスプレイング、コミュニケーション的暴力、会話の引き出し、言語的なポリティクス、アイデンティティと一人称、人々をつなげる言葉、誠実な謝罪と不誠実な謝罪…。難しく切実で面白い「言葉とコミュニケーション」を、「哲学」と「私」のあいだのリアルな言葉で綴るエッセイ。



今すぐ使えて、会話がはずむ 今日のタメ口英語

Kazuma 著 KADOKAWA

「だね」「ねえちょっと」「マジで」「ウザったんだけど」「ヤバい」…といった本当の感情を込めて使える英語。

本書では「リアルな日常の一コマ」をつなぐふだん使いの英語を集めました。

本当に英会話を楽しみたいなら、英文法や発音から始めるよりも、「タメ口」から学ぶのが一番の近道です。



10代から知っておきたい あなたを閉じこめる「ずるい言葉」

森山至貴 著 WAVE出版

「あなたのために思って」「友達にいいからわかるよ」「昔はそれが普通だったのに」…よく耳にする言葉です。でもこういう言葉にちょっとモヤモヤしませんか？

実は言葉の裏には言う側の自覚なく(あるいは自覚的な場合も)別の意味が隠されていることがあって、それでなんとなくモヤモヤしたり、イラッとしてしまったりしてしまうのです。そういった納得のいかない言葉について、なぜそんな言葉が使われるのか、そこにはどんな意図が隠されているのかを解説していきます。

また、そういった言葉を言われたときにはどのように考え、対処したらいいのかにも触れるとともに、より理解を深めるための関連用語を取り上げています。



ぼくたちが知っておきたい 生理のこと

博多大吉/高尾美穂 著

辰巳出版

女性の生理のことは、男性も理解、配慮、サポートしていくべきというのが近年のトレンド。それがこの本の題名「ぼくたちが」です。女性自身も考えないようにしていたこと、知らないでいたことがたくさんあります。

産婦人科医の高尾美穂さんと芸人の花丸大吉さんの会話で、生理をわかりやすく説明しています。